

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：33912

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370707

研究課題名(和文) タスク前計画時間が留学前・後学習者の会話構築パタンに与える影響

研究課題名(英文) Effects of pre-task planning on conversational patterns before and after study abroad experience

研究代表者

新多 了(Nitta, Ryo)

名古屋学院大学・外国語学部・准教授

研究者番号：00445933

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：英語学習タスクではしばしばタスク前に計画時間が与えられるが、それがペアの会話パタンに与える影響については十分に理解されていない。本研究では、ディスカッション形式のスピーキングタスクにおいて、計画時間が会話パタンに与える影響について検証を行った。また、海外留学の前後の2回実施し、異なる習熟度における会話パタンについても検証を行った。

その結果、計画時間を与えることで話者がモノログスタイルを取るようになり、本来の目的であるインタラクション能力を十分に測ることができないことがわかった。また、留学前後で第二言語スピーキング運用力の改善が見られたにもかかわらず、会話パタンの変化は見られなかった。

研究成果の概要(英文)：The effects of pre-task planning time in speaking tasks on conversational patterns have not been sufficiently understood. Using a complex dynamic systems approach including dynamic descriptive methods, the aim of this research was to investigate the effect of pre-task planning in a paired task among learners before and after study abroad experience. The analysis revealed the possibility of a contrastive mode of discourse under the two planning conditions, raising concerns that planning might deprive learners of the chance of demonstrating their abilities of interacting collaboratively. In addition, despite increased proficiency through study abroad experience, pre-task planning tended to give identical effects on their conversational patterns between before and after study abroad.

研究分野：人文学

キーワード：第二言語習得

1. 研究開始当初の背景

(1)近年、日本の英語学習環境において、コミュニケーション重視の英語授業の必要性が主張されているが、実際の現場では十分な成果が得られていない。世界的な外国語教育の趨勢として、これまでの第二言語習得論の研究成果に基づく「タスクを中心とした外国語教育(Task-Based Language Teaching: TBLT)」の有用性が確立している。

過去20年以上に渡ってTBLT研究は認知的アプローチを理論的基盤として発展してきた。この理論ではタスクは学習者に与えるインプットであり、様々なタスク(インプット)を、様々な条件下で与え、どのようなアウトプットを引き出すことができるか研究されてきた。また、これらの研究では多くの学習者のデータを集め、グループの平均値を比較して統計分析を行う、還元主義的(reductionism)アプローチが主に取られてきた。

(2)過去20年に渡ってTBLT研究は大きな進展を遂げ、教室での外国語学習に多くの示唆を与えてきたが、還元主義的アプローチだけでは、十分に説明できない結果も多く報告され、第二言語データをグループで扱う認知的アプローチの限界を指摘する研究者も多い。そのような中、近年注目を集めている複雑系理論(complex dynamic systems)に基づくアプローチでは、個々の学習者の個別性と変化に注目する。このアプローチでは、個々の運用について詳細な記述を行い、還元主義的な手法では拾い上げることができなかった重要な変化に注目する。

(3)申請者らはこれまで、ディスカッション形式のタスクにおいて、日本人英語学習者の英語スピーキング運用力が、計画時間を与えることによってどのように改善するかを調査し、英語習熟レベルの低い学習者では、計画時間を与えても、統計的に有意な改善が見

られないことを確認した。さらに言語テスト環境下において会話分析の手法を用いて詳細な分析を行ったところ、計画時間がない場合には、お互いに対話を繰り返しながら、協力して会話を構築していったのに対して、計画時間が与えられた際には、モノローグのようにお互いがそれぞれの発言を繰り返す傾向があることを発見した。

2. 研究の目的

上記の背景およびこれまでの研究成果をもとに、本研究では複雑系理論のアプローチを用いることで、学習者がお互いどのように協力しながら会話を構築していくのかについて調査する。また、留学前と留学後の2回データを採取することで、同じ学習者が異なる習熟度においてどのような会話パターンが見られるかについても調査を行った。具体的には、以下の点について明らかにすることを目的とした。

(1) これまでの研究で試みた研究手法をさらに多くの学習者にも適用することで、会話構築プロセスの総合的な理解を深める。特に学習者がお互いに協力しながら構築していくダイアログを一つの系(システム)としてとらえ、タスクに取り組む時間的経過とともに会話システムがどのように展開するかについて知見を得る。

(2) 複雑系理論に基づく「ダイナミック記述法(dynamic descriptions)」及び会話分析手法を使い、計画時間の有無によりどのような会話構築パターンの違いが見られるか検証する。具体的には、ターン・テイキング(発話順序の交代)に注目し、各ターンでの発話量の変化をグラフ化、数種類のパターンに分類し、どのように会話が構築されていくか、計画時間の有無により、顕著な違いが見られるかについて詳細な分析を行う。

3. 研究の方法

研究の参加に同意した32名を二人一組で16のペアに分け設備のある部屋に来てもらい、留学前スピーキングデータの採取を行った。

手順は、ウォームアップタスクを行った後、2回の異なる内容のタスクを実施した。1回目または2回目のタスクいずれかの前に3分間の計画時間を与えた。タスク及び計画時間の与える順序による影響をできるだけ少なくするため、各ペアが異なる順序でタスクを実施するように工夫した。タスクはケンブリッジ英検のFCE (First Certificate in English) から4つ(タスクA-D)を準備し、その中から2つをランダムに使用した。

データ分析は、以下の2つの側面から行った。

(1)ダイナミック記述法:タスク実施から得られた64の留学前後の会話(16ペア×計画時間有・無×留学前・後)を、ターン・テイキングごとの発話量でグラフ化し、その変化のパターンを分類した。ダイナミック記述法とは、時系列で集められたデータをビジュアル化することで、変化にある特定のパターンが見られるか分析を行う複雑系理論の研究手法の一つである。

(2)会話分析:パターン分析だけでは測ることができない、意味構築プロセスを検証した。会話分析は、録音された会話の詳細な記述を分析することで、2名の会話者がどのように意味を構築しているかを検証する分析方法である。

4. 研究成果

(1)留学前後の習熟度の変化:4ヶ月間または10ヶ月間の英語圏大学での留学経験の結果、「流暢さ」「複雑さ」「正確さ」の側面で改善が見られた。特に、留学後は多くの学習者に「語彙的フレーズ(lexicalized phrases)の使用が顕著に見られ、流暢さの改善に影響を

与えていた。また、複雑さにおいては、特に関係詞節を使用する頻度が増えていた。

(2)計画時間の有無による会話パターン:

1ターンの発話量の変化をダイナミック記述法の手法を用いて分析した結果、計画時間なしの場合、お互いが短いターンを繰り返しながら会話を構築していく傾向が見られた(図1)。

その一方、計画時間があった場合、最初はターンごとの一人の発話量が多くなり、その後急激に会話が停滞する傾向が見られた(図2)。

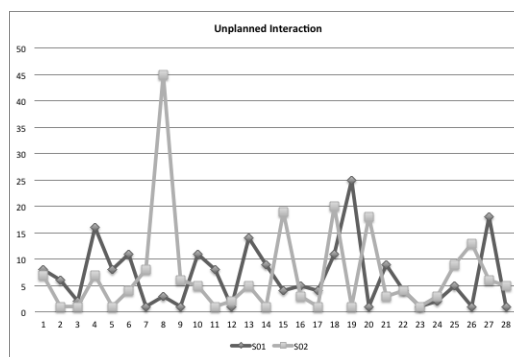


図1 計画時間なしのターン数の変化

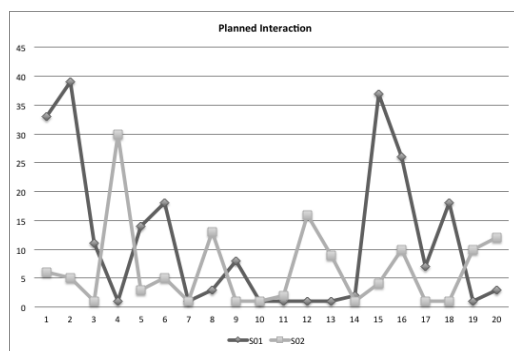


図2 計画時間有りのターン数の変化

一つ目の計画時間なしの場合には、学習者はそれぞれまだ話す内容が決まっていなため、話す内容を探しながら会話を進めていく必要がある。その結果「協力的(collaborative)」なパターンが生まれたと考えられる。その一方、計画時間がある場合には、すでに自分が話す内容を準備している。そのため、まず自分の考えを伝えようとして「並

行的(parallel)」パターンが生まれるが、その後には話す内容がなくなってしまい、会話が停滞してしまったと考えられる。また、計画時間が有る場合には、一方が会話全体と独占してしまう「非対称(asymmetrical)」パターンも生まれやすくなった。

(3)留学前後の会話パターンの変化:本研究実施前には、留学前と留学後で習熟度が変化するのに伴い、典型的な会話プロセスのパターンにも顕著な変化が見られることを予測した。しかし、留学前後で習熟度の違いが見られたにもかかわらず、計画時間の有無の間に見られた会話パターンの違いは留学後も変化が見られなかった。つまり、計画時間がない場合はお互いが協力しながら会話を構築した一方、計画時間なしではそれぞれが一方向的に発話をする並行的パターンが留学後にも見られた。

(4)本研究結果から、計画時間の有無が会話パターンに大きな影響を与えることが観察できた。さらに、留学前後で大きく習熟度が変化したにもかかわらず、会話パターンが変わらなかったことから、計画時間の有無が会話パターンに与える影響の大きさを推察することができる。

先行研究では、計画時間を与えることで第二言語スピーキング運用力が改善することが報告されているが、本研究結果から会話においては必ずしも学習者の「インタラクション能力(interactional competence)」の伸張に繋がらない可能性がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

新多 了、第二言語動機づけはどのように変化するのか:複雑系理論からのアプローチ(招待論文) *JACET Kansai Journal*, 査読有、18巻、2016、21-35
Nitta, R. & Nakatsuhara, F., A multifaceted approach to investigating pre-task planning effects on paired oral test

performance, *Language Testing*, 査読有, 31/2, 2014, 147-175.

Baba, K. & Nitta, R., Phase transitions in dynamic development of writing fluency from a complex dynamic systems perspective, *Language Learning*, 査読有, 64/1, 2014, 1-35.

〔学会発表〕(計8件)

中田賀之、新多 了、竹内理、「動機づけ研究最前線:実践との対話を目指して」(招待シンポジウム) 2015、JACET 関西支部秋期大会、神戸学院大学(兵庫県・神戸市)

Ryan, S., Chan, L., Nitta, R., "Vision, motivation and narrative identity in the EFL classroom context (Colloquium)", 2015, CAES

International Conference: Faces of English, University of Hong Kong(香港・中華人民共和国)

新多 了、間所智子、「英語絵本における繰り返しパターンの分析:複雑系理論からのアプローチ」2015、外国語メディア教育学会(LET)関西支部春期大会、大阪電通大(大阪府・寝屋川市)

Nitta, R., "The ideal L2 self, self-regulation and L2 writing development: A complex dynamic systems approach", 2014, BAAL Annual Conference, University of Warwick(コベントリー・英国)

Nitta, R., Co-adaptation of the Ideal L2 Self, self-regulation and L2 writing performance, 2014, International Conference on Motivational Dynamics, University of Nottingham(ノッティンガム・英国)

Nitta, R., Self-regulation and L2 writing development: A complex dynamic systems perspective, 2014, Matters of the Mind: Psychology and Language Learning, University of Graz(グラーツ・オーストリア)

Nitta, R., Nakatsuhara, F., Is pre-task planning beneficial in speaking tests?, 2013, JALT Annual Conference, Kobe Convention Center(兵庫県・神戸市)

Nitta, R., Self-regulation and L2 writing development: A longitudinal study from a complex dynamic systems perspective, 2013, BAAL Annual Conference, Heriot-Watt University, Edinburgh(エディンバラ・英国)

〔図書〕(計4件)

馬場今日子、新多 了、大修館書店『はじめての第二言語習得講義-英語学習への複眼的アプローチ』、2016、224

Nitta, R., et al., Multilingual Matters, *Motivational Dynamics in Language Learning*, 2015, 367-396.
Nitta, R., et al., John Benjamins, *Task-Based Language Learning: Insights from and for L2 Writing*, 2014, 107-136.
Nitta, R., et al., Multilingual Matters, *Language Learning Motivation in Japan*, 2013, 268-290.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新多 了 (NITTA RYO)
名古屋学院大学外国語学部准教授
研究者番号：00445933

(2) 研究協力者

中津原 文代 (NAKATSUHARA FUMIYO)
英国ベッドフォードシャー大学英語評価
研究所上級講師